

功德と高圧ガス保安

「功德（くどく）」という言葉をご存じでしょうか。

もともと仏教の言葉で、「善い行いによって得られる、目に見えぬ報い」——つまり、善行＝徳の積み重ねによって自分や他者に安らぎをもたらす力のことを指します。

仏道を広めること、その象徴として寺を建て、仏像を祀る等はすべて徳を積み、功德ある行いとされています。けれど、なぜその行為が「徳を積む」と言われるのでしょうか。

それは、仏の教えを広めることが、人心を安らかにし、争いをなくし、国家に平安をもたらすことを目的としたものに他なりません。ですから、仏教に帰依した人たちは、寺院を建て、仏像を奉納するというわけです。

そんな行いを頑張ろうとした中国の皇帝の、古い伝説があります。

「功德なし」と言われた皇帝

一五〇〇年前、梁を治めた武帝は、仏教に深く帰依した皇帝と言われていました。

国庫を傾けるほどの巨費を投じ、寺院を建て、仏像を奉り、僧侶を養ったのです。

ある日、インドから渡ってきた僧——達磨大師に、武帝は

「私は数多くの寺を建て、仏に仕えてきた。どれほどの功德があるだろうか」

と尋ねましたが、達磨は静かに答えました。

「無功德」

武帝は耳を疑いました。未だかつて歴史に無いほどの、自らの仏心への献身が否定されたのですから。

達磨大師は、真の功德は、清らかな心のうちにのみ宿るのだと説いて去ったと言うことです。

善のかたちをした“空しさ”

武帝は仏教を広めたとして名を残しましたが、彼が築いた寺は民からの重税によって建てられたものでした。やがて反乱が起き、都を包囲された彼は、寺にこもったまま飢え死にに追い込まれます。しかしそのとき誰も、窮地の彼を助けには来てくれませんでした。

仏を敬い奉る彼の行いが、国や人民に平安を与えることができなかったのは当然でしょう。

なぜなら彼の望みが、仏の教えを広めて人心や国家に平安をもたらす——そんなことではなかったからです。そう、きっと彼の望んだのは、仏教に深く帰依した皇帝といわれ、評価されることでした。

高圧ガス販売店の誇り

さて、昭和から時代が平成に移るころまで、「保安無くして商売無し」というスローガンで、半世紀以上の歴史を紡いできたのが高圧ガス販売店業界です。

そして平成四年に行なわれた、高圧ガスの保安法の大改正まで、販売店が消費先の保安を推進するドライビングフォースは「誇り」と「責任感」でした。当時は、消費現場の事故を防ぐために、何をすればいいか。販売店は自ら考え、行動しなければならなかったのです。

そして何をやっていたかって？ それは、外から見れば今と変わらないかもしれません。

現場で安全な利用を助言し、放置容器の回収を行ない、保安講習会を開催して受講をお勧めしていました。

ただ、当時は他に方法がなく、それしかできなかったのでしょう。

ただ、それらの行動には「なんとか事故をおこしてもらわないように」という切なる願いがありました。

義務が意識を変えた？

昭和の取締法時代——それまで、消費現場への保安活動として、形式的にはっきりしたものは明言されていなかったのです。

ところが平成四年に行なわれた、高圧ガス取締法の大改正によって、酸素・アセチレン・LPGを使う、溶接・溶断現場等、一部の消費先への周知活動、そして文書配布だけが義務になりました。

その瞬間から、意識は静かに変わり始めます。つまり——

「消費現場の事故を防ぐために、何をすればいいか」
から
「何をしておけば、その義務を果たしたことになるだろうか」
—— へと。

目的が消費現場の「安全」確保から、自らの保安義務達成＝「違反と言われたいための最低の活動」の形だけの取り繕いへと変化していきました。

こうして、消費先の安全を確保するために努力する販売店の保安という時代が終わり、「保安をしたと認めてもらうために行なわれる」時代が始まったのです。

それはまるで、梁の武帝が寺を建て、仏像を奉納したのと同じ構造だと思いませんか。

指差呼称はなぜ行なわれる？

たとえば現場では必ず行なわれている、指差呼称を例に取ると。

それは「右よし、左よし」などと声に出して、「安全を確認」します。

もしこの動作が

ポケットから手を出す、指を立てる、左右に振る、声を出す、右よし、左よし。

これだけやっていけば、違反にならない、上司に叱られない、マニュアルに則ってる。

でももし、首を振って視線が左右を確認していなければ、それは武帝がやった布施と同じではないでしょうか。そんな保安（？）によって至る結末はなんでしょうか。その指差し呼称の目指している功德はなんでしょうか。

ルール通り、最低限のことは「やったよ」と言い訳するため、自分の責任を回避するためだけの行為を積み上げて、現場の保安という結果は訪れるのでしょうか。

仏教の目標は煩惱から逸脱した涅槃の境地、彼岸だと言われます。そこへ行き着くため、その道を究める僧は修行を行なうのです。少しでも煩惱に負けると、此岸に逆戻りするのだそうです。

そんな教えも理解せず、形だけを求めた武帝がどんな最期を遂げたか、もう一度考えてみてください。

無功德と形だけの保安

武帝が功德無しと言ったのは、達磨大師が武帝の望む功德を、仏教の悟りを開いた、仏に近い状態に至るものと判っていたからです。

武帝の希望はそうだったかも知れませんが、実際、彼はそんなことを望める行いはしていませんでした。

寺院の建立や仏像の奉納のため人民から搾取し、国家と民衆の平安を求めなかった結果の破滅は、来るべくして来たものに違いありません。

高圧ガス保安の現場においても、このくだりは教訓になります。義務を果たすことだけを重要視して、形だけ取り繕うことに終始すれば、人も現場も安全ではられません。高圧ガスの現場の保安が、高圧ガスの「消費現場が安全であるため」に行われなくて、形だけの努力を重ねていくことに何の意味があるのでしょうか。

彼岸と保安乖離（Safety Drift）

では、我々が目指すべき保安とは何か。

高圧ガスの消費現場が「安全であってほしい」という思いを持ち、努力し続けることです。

事故の起きない、あるいは起きてもほとんどたいしたことのない被害で収まる、保安ルールや意識が徹底した現場は理想の境地、それは仏教でいえば悟りを開いた者が至る涅槃の地、「彼岸」でしょうか。

高圧ガスという、放っておけば事故になる危険物を扱う我々は、日々の努力で悟りへ至る修行（六波羅蜜）をしているようなもの。少し気を抜けば彼岸への道から外れ、いつ事故が起こり甚大な被害を出すかも知れない危険な状態、つまり煩惱の苦しみ渦巻く此岸にたちまち逆戻りです。

この理想と現実にはゆらぎが生じていく状態を、私は「保安乖離（Safety Drift）」と呼んでいます。そして取扱者は、自らの意識がその状態になっていないかを、定期的に自主点検しなければならないと提唱しています。

高圧ガスは、人間が自然の状態よりたくさんのガスを利用したいと作り出した常ならぬ危険な状態。

これに携わる我々が、安全に利用しようとするなら、保安（徳）を積み重ね、安全な現場（彼岸）へ至るために、日々努力（精進）し続けなければならないのでは無いか、と切に思うのです。

（了）